

編集後記

第26巻1号をお届けします。本号の発行が大変遅れて申し訳ありません。早くから原稿をいただいていた著者の皆様や本誌の到着を心待ちにしておられる会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。私事ながら4月からの大学での主任業務量の激増もあり、編集作業が滞ってしまいました。

さて、巻頭言には昨年名古屋で開催されましたICFIA08の実行委員長をお務めになりました、本研究懇談会委員長でもあります酒井忠雄先生よりご寄稿いただきました。これまでの本研究懇談会の活動が国際的にも認知され、今後のさらなる発展が期待される中、若い次世代の研究者への叱咤激励をいただきました。本研究懇談会の前委員長であります岡山大学名誉教授の本水昌二先生が山陽新聞賞を受賞されましたので、酒井先生からの記事のご紹介を掲載させていただきました。

指標欄には佐賀大学の田端正明先生よりキャピラリーチューブ中での溶質の分離挙動について大変興味ある現象をご紹介いただきました。石井大道先生のキャピラリーチューブを用いるマイクロFIA法やキャピラリー電気泳動法などで皆さんよくご存じのキャピラリーですが、これに混合溶媒を流すだけで、溶質の分離が達成できるとのことです。溶液化学の立場から、マイクロ溶媒クラスタ抽出機構によって説明できるとのことです。

総説には、タイのChulalongkorn大学のChailapakul博士に流れ分析法における電気化学検出法の数多くの例を200以上の論文を網羅した20ページにわたる総説をご寄稿いただきました。同女史はタイの若手の研究者で、東京大学の藤島先生の研究室でのダイヤモンド電極の研究を行った経験があるほか、国内の多くの研究者との交流から多くの学生さんを留学させるなど活発の研究者

です。読み応えのある総説をご堪能ください。編集委員の松本先生にはこの長編の総説のレビューをしていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

研究論文の欄には、今回は国外から3報と国内から3報の合計6報の論文が投稿されました。次号にも会員の皆様からのたくさんのご投稿をお待ちしております。

トピックス欄には今回も私の研究室の大学院の学生さんに書いてもらいました。会員の皆様の周辺でも声をかけていただき、たくさん投稿していただければ幸いです。

報告の欄には本年4月23日、24日にタイのChiang Maiで開催されましたFlow-based Analysis 2009に参加されました島村先生に報告記をご寄稿いただきました。2010には、タイの南方のPattayaあるいはKrabiで次回のICFIAが計画中と聞いていますので、楽しみです。

国内の学会情報は、徳島大学の田中秀治先生に、FIA Bibliographyは岡山大学の高柳俊夫先生にお願いいたしました。次号からはBibliographyは神奈川工科大学の飯田泰広先生に交代することになりました。高柳先生、長い間ご苦労さまでした。飯田先生にはよろしく願いいたします。今年の9月14日から18日にスペインのマヨルカ島でFlow Analysis XIが開催されます。日本からも多くの方が参加されるのではないかと思います。報告記をどなたかに書いていただきますので、ご参加でない皆様には報告記にご期待ください。

今後ともこの会誌が本会員の皆様方の情報交換の場になることを希望しております。ご寄稿をお待ちしております。

JFIA 編集委員長
今任稔彦